

織部黒威しの敵と突合突伏たる時、左内は家人もなく鎗もなし。指刀迄に付、刀を抜て鎗下をくゞり入て、黒威しの首を取る。此首を献上して御前直りたり。最初狸々緋の羽織と織部突合けるが、後に黒威しと替り、狸々緋は野村左馬と突合、最初左馬と突合ける黒威し織部方へ参り、右の趣に成る。左馬は狸々緋の羽織と突合候處、狸々緋の外手負て引取候。前に藪あり、此藪蔭にて見え不申候と、常々織部申候旨、丹羽伊兵衛語る。又津田勘兵衛話に、岡山表にて此方より五六人、敵も五六人寄合突合所に、鎗下に敵一人手負出來す。誰が突倒したるも不知。其首を取度事かなとおもひぬれど、烈敷場にて中々不成所に、金の蠅取笠の冑を着たるもの一人、刀を抜て飛入り首を取たり。後に聞けば永井左内也と云ふ。敵合うちに、此方鎗の上に長き鎗横たはりてあり。それを取度事とおもへども不成。惣て敵の鎗は長くて目の際へ來り、我鎗は短くてとどかぬ様におもふもの也。

其鎗は永井左内が鎗と聞きたりと勘兵衛話を、有澤孫作聞たりと云ふ。其場の衆は津田勘兵衛・津田源右衛門・西尾隼人・野村左馬・丹羽織部、其外にもありしよし。左内が不首尾

は、餘りにかせぐとて夜中路を踏迷ひ、伊達陸奥政宗の陣所へ行て捕へられ縛られぬ。其時松平筑前守家永永井左内と名乗れば、使者を添へ送り來る。賀州の陪臣と稱して請取、御知行被召放と云。

一、葛卷隼人の働御衆議

同日黒門にて梶川彌左衛門、一錢刺の小屋蔭に居て見ければ、一番葛卷隼人、次に古屋所左衛門行くを見て、推續き彌左衛門も行くと言ふ。其外も別の所に居たる者、隼人が出るを見て出るもの多し。其内に大男の黒威せるもの、隼人よりも張出て敵き合たり。此者は則古屋所左衛門と御衆議極る。又御馬廻に葛岡平四郎といふ大男、黒威しを着、右の所に居たる内より一番にかけ出て突合ひ、敵引ければ門内へ付入し、門内にて能き敵を突伏て首取たりといふ。去ども其後大坂の事にて平四郎切腹せり。二度目の御衆議の時、梶川彌左衛門如何おもひけん、葛卷隼人より張出て働たるは葛岡平四郎也といひ出たり。彌左衛門口上前後相違す。微妙公葛岡事を殊の外御惜み御後悔被成候と云ふ。又隼人へ御尋は、黒門にて敵門外へ引入し時付入に可仕事

也。何とて其圖をばづしけると也。隼人私事足に矢疵を蒙り、其矢を抜候へ共、足甚だ腫出で引取申事さへ難仕ほどに、付入は成不申候といふ。其外へは御尋も無之。

一、大坂陣武邊話の眞偽

如此家中にてさへ人の口輾轉す。永井左内は夏陣の後追付病死。丹羽織部は元和五年に病死。二度目の御衆議は寛永八年にて、元和元年よりは十八年後の也。それ故申度きまゝの様に成ると見えたり。其後又三度目の御吟味に合て立身するもあり。色々の働きの者共出來と云ふ。一家の内にてさへ如此なれば、他家にての武功いひ立無餘儀事也。佐藤兵部夏陣に二十歳許成小者体の首を取を、山田半右衛門見付て、むごき事をする。ゆるしてやれといへども押付首を取る。其後棄てある冑をきせ、冑首にし御實見に入たり。其路すがら馬上に冑附の首を提げ、瀧與右衛門に逢て是をみよと云ふ。二度目御衆議の時、我等手前の儀は瀧與右衛門見申候と云ふ。與右衛門御尋あれば、道にて見申と云ふ。其外に證據はとあれば、山田半右衛門見候と云ふ。半右衛門へ御尋ねあれば、右の通に申候。依之兵部、半右衛門と論

に成間不宜無言也。兵部手前不首尾千萬なれども何とも不
思、却て軍功不立様に上を怨みけり。横山大膳別て目をか
け候に付、大膳を頼む。大膳好時節ありて、兵部大坂にて
の首尾御聽に達しけれども、兎角の御いらへなし。然れど
も大膳方より、御手前大坂にての首尾、今朝委細御耳に立申
候。頓て可有吉左右と書狀遣す。兵部此書狀を取て御國を
立退き、江戸へ行て佐藤甫閑と改稱し、三千石に可抱申と
被仰方有之と披露す。大坂の働は悉皆偽也。平岩彌右衛門
は御使番にて七百石、冬陣の時眞田丸にての首尾を云立、御
國立退き尾州へ赴て四千石取る。大島雲平は御馬廻にて二
百五十石、岡山表にて鎗を合せ、左の股を突き手負たる首尾
を、御旗本土屋權佐被見申。權佐手前の事は雲平見請たる
とて御國を御暇取、江戸へ行て柳生但州へ取入り、加藤肥
後守殿へ七百五十石にて有附、肥州滅亡の後紀州和歌山へ
先知に被召出。今其子小源太とて無相違紀州に有之。小幡
勘兵衛冬陣の時、御家の才監物古傍筆とて御備をかり、
監物は富田越後組故越後組に入て相勤む。眞田丸にて大
なる働有之様に江戸にて被申候得共、御家にては且て知りた